

問答草（一）

一、真の樂天

甲「先生、私はどうも仏法が嫌いなのです。」

乙「なぜですか。どこが嫌いですか。」

甲「どうも仏法はジメジメしている気がするのです。もつと明朗な樂天的なところがほしいのです。私は暗い人生は嫌いだ。」

乙「私もちょうどそのとおりを思っています。だれしも暗いのは嫌いです。」

甲「それなら、なぜ仏法を信じられますか。」

乙「仏法が私を明るくしてくださったからです。あなたに問います。あなたは明るいですか。」

甲「いいえ明るくないのです。暗いから明るくなりたいのです。」

乙「そうでしょう。今は、明るくない、樂天家になりたい、など言っていますが、実際は暗いでしょう。暗ければこそ光を求めるのです。」

甲「そうです。しかしこの上仏法でも聞けば、もつと暗くなりはしないかと思うのです。」

乙「それはたいへんな間違いです。暗いのは、仏法が暗いのではない。現実の人生が暗いのであり、あなたの心が暗いのです。仏法はその暗さを暗さとしてそのまま説くがゆえに、暗いように思われる半面があるのです。しかしそれあるがゆえにほんとうの明るさもまた与えられます。」

甲「それはなぜですか。」

乙「世の多くの人は、無明に背をむけて、それから逃げようとし、あるいは、闇に蓋をして明るくなろうとします。それは間違いです。真の光は、闇に徹してのみ生まれてくるのです。」

甲「喩えて言えばどうですか。」

乙「死を考えて暗いものは、死を考えまいとすることによって救われるのではなくて、死に徹すること、無常を無常と知って、死なぬ仏と一体になることによつて救われる。仏は、死を考えまいとする方向にはすがたを出さず、死を死としてみつめる彼方にあるのです。そのほか一切の苦悩がそれです。暗ければ闇に徹しなさい。苦しければ苦に徹しなさい。真の樂天はそこにのみある。」

甲「間違っていました。」

二、念仏申せ

甲「先生、私は学校の先生をしていても、ちつともおちつかないのです。修養団もやりましたし、いろいろと工夫してみるのが。」

乙「お念仏申しなさい。お念仏よりほかに、あなたがあなたの世界には帰られないでしょう。蓮如上人は、『あなたがちにわが心の悪さをもまた妄念妄執のこころの起るをも止めよと言うにもあらず、ただ商をもし、奉公をもせよ。獵漁をもせよ。かかるあさましき罪業にのみ、朝夕まどいぬるわれらごときのいたずらものを助けん

と誓います。阿弥陀如来の本願にてましますぞと深く信じて一心に……」報謝の念仏を申せと教えられました。

先生だろうと、商いだろうと、奉公だろうと、宗教家だろうと、『かかるあさましき罪業にのみ朝夕まどいぬる身』でしかありません。しかるに、先生をしているだけで、おちつこうとしたり、それであつぱれと気取ったところで、それは高上りしただけです。

親鸞聖人もまた、『朝家のおんため国民のために念仏を申し合わせたまい候わばめでとう候うべし。』と言つていられます。あなたのためにも、子どものためにも、国家のためにも、ただ『お念仏』申すことこそ許された一つの生活であります。念仏がなかつたら、すべては、そらごとだわごとにすぎません。

お念仏のみが真実だとは、信じたり、称えたりする私が真実であるのではなくて、私の上に生きてくださる如来のみが真実だということです。真実ぬきではおちつけないはずです。」

三、ただ一本の道

甲「仏教復興の声が高いようですが、盛んになつたと思われませんか。」

乙「そうかも知れない。」

甲「盛んになつたのじゃない。ただ一時的現象だと言うではありませんか。」

乙「そうかも知れません。」

甲「どちらがほんとうでしょうか。」

乙「どちらかわかりません。どちらでもいいのです。私どもは、ただ歩むべき道を歩めばいいのです。よし人数が少かろうと、世の中に入れられようと、入れられまいと、ただ一本の道を歩みきつてゆくだけです。深い深い聖人のみ教えのままに。」

四、二つの本尊

甲「どうも聞く時は、そうだそうだと思つておられるのですが、少したつとこれではいけないと思ひます。どうすればいいのですか。どうか教えてください。」

乙「同じことを何度言つて来るのです。少しは本気になつてお聞きなさい。一方の手にはこの世の富とか名誉とかを本尊とし、片方には仏教を知つてこの世もあの世も幸にならうとする。そんな二君に仕えるような生き方の人に聖人の信仰がわかりましようか。一方の花を棄てなさい。二つの生命に生きることは許されません。」

五、命

甲「どうもどこを聞いてもはつきりしません。」

乙「あなたはかつて、だれか何かにいのちを差し上げましたか。あなたの貪欲のためでなしに。」

甲「ありません。」

乙「はつきりしないはずですよ。あなたは一度、何かにあなたの全体を捧げてしまひなさい。一度命をすてた者にだけ、しつかりした生活があります。生命を捧げるほど

の世界を持たぬものに、はつきりとした生活があろうはずがないのです。信仰問題の解決とは、あなたのいのちの問題の解決です。聖人は法然上人に、念仏に、如来に全体を打ち込んでいられます。生命をつぐ者は、生命を捧げてゆく、あなたの全体は、あなたの奥深くしまい込んで、口先や、手先や、安い涙くらいで、如来を得ようとする。そんな自力はいくら繰り返してもだめです。」

六、道の道

甲「先生、念仏の大道と言われますが、そんな道は何にもならない気がします。何とか、もつと直接人生問題について示された方がいい気がします。」

乙「それならば、仏教の門をたたかないでも、本屋に行けば山ほど本があります。左から右に理解し、利用できるようなことは、いくらでも知ることができます。」

甲「念仏道などはあまりに迂遠なような気がします。」

乙「そうかも知れません。確かに、二三日講習を受けたらすぐ利用できるようなものではないです。ですが、念仏の世界に出されたものにとつては、念仏とは、太陽を仰ぐようなものであり、これなくしては生きられないのです。これをぬきにしては、一切の生活が成り立たないがゆえに、真実そのものを失うがゆえに、迂遠に見えてしかもいちばん直接な道であります。一切の道を道たらしむる道であります。しかるに多くの人はあまりに、功利的です。あまりに手近に効果を得ようとして、ついに何も得ないのです。」

甲「わかりました。私の過去がまつたくそれでありました。人生を変えます。」 3

七、念仏

甲「先生、私は、念仏など称えなくてもいいと思います。」

乙「なぜですか。」

甲「味噌の味噌腐きは上味噌にあらずと言います。念仏を称えている人を見ると、まだ不徹底の気がします。」

乙「なるほど、しかし問題は、その味噌です。味噌が上味噌になったのか、あるいは腐ったのか。あなたは、あの生花に型のあること、お茶にも作法の型のあることをご存知でしょう。型をおさめて、いよいよ熟達して、ついに何も考えないで入れても乱れていない、くずれていない時になって、はじめて、型を脱し得るのです。その時こそ、全身これ茶、全霊これ華、となった時であります。念仏もそのとおりです。念の極み、念を絶し、称の極み、称を超えた時、はじめて、色心二法、三業四威儀、すべて念仏の域であります。その時になれば、あなたのようなことを言わなくてもすみます。かつて念仏なく称名なき者が、横にそれ、あるいは逆転して、称名を貶し、念仏を軽んずるがごときはいけないことです。しかもそれを誇るに至つては、味噌はついに味噌でなくなつたのです。」

八、粉骨摧身

甲「ながくお育てにあずかりやつと何もかも間に合わぬことに気づかせていただきました。楽なことにしていただきました。」

乙「それはよいことに気づかせてもらいましたね。しかしこの上は、これですんだのでなくて、いよいよ重い重い重荷を背負わせてもらったのです。銘文に聖人は、聖覚法印の御文を引いていられます。曰く『粉骨可報之、摧身可謝之』と。『骨を粉にしてもこれを報ずべし。身を摧きてもこれを謝すべし。』と読みます。聖人はこの文の次に『大師聖人の御教えの恩徳のおもきことを知りて、骨を粉にしても報ずべしとなり、身をくだきても恩を報ゆべしとなり。よくよくこの和尚のこの歌を御覽ずべしと。』と説かれました。このみ教えのごとく出発して生きはじめた時、他力の妙旨は、初めてわかつてくるのです。」

九、いざとならば

甲「なぜに先生は、私の信仰をよいと言ってくれないのですか。」

乙「そんなことを言っていることがよくない証拠です。あなたの信仰は貪欲の喜びです。貪欲がニコニコしていれば、念仏と結びつけています。あなたには、あなたの周囲の皆が恐れているあなたの我慢です。少しも見えていない。いざとなればいつでも、念仏はものを言わなくて、我慢だけがものを言う。それを人が責めたり文句言えば、悪人正機の言葉を使つて、自分を弁解する。真の念仏の世界にはまだまだ遠いかなです。」

十、浄土の眷属

甲「先生、正定聚とはどういうことですか。」

乙「他力の大信心を得たる人のことです。聖人は『この信樂は、衆生をして無上大涅槃に至らしめたもう心なり。この信心すなわち大慈大悲の心なり。この信心すなわち仏性なり。仏性すなわち如来なり。』と説かれました。」

また浄土の二十九種莊嚴の一つに莊嚴眷属功德成就というのがあります。お浄土の大衆の功德成就のことです。これを天親菩薩は、『如来浄華の衆は、正覚の華より化生す』と説かれましたが、鸞師はこれを釈して、『同一に念仏して別の道無きがゆえに、遠く通ずるにそれ四海の内皆兄弟となすなり。』と説かれました。浄土の眷属を生死界に及ぼして、信心の行者をもそのまま浄土の大衆だと説かれたのであります。されば聖人は、『煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相廻向の心行を獲れば即時に大乘正定聚之数に入るなり。』と断定せられました。われらはこの人生にいて肥桶を運んだり商いをしたりするままで、浄土の大衆のうちは加えられたことあります。ただ如来本願力によるのです。」

甲「ありがとうございます。」